サヨナラ私、コンニチハ俺

春日まりも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
サヨナラ私、コンニチハ俺

【Ｎコード】
Ｎ１２２２Ｅ

【作者名】
春日まりも

【あらすじ】
バサリ。自分の黒く、長い髪が床に落ちる。その時から私は俺になった。今まで女であった私がある日を境に男装をし、男としてこれからの日々を過ごすことに。それはすべて兄のため・・・・・・とシリアス風にいきたいのに、何故か周りがそうはさせてくれなくって！？シリアス風味な学園ドタバタコメディです！

プロローグ

サヨナラ私。

バサリ。
ハサミで切った自分の黒く長い髪が落ちる。

鏡に写る自分はもうすでに
女ではなかった。

コンニチハ俺。

この時、私は女を捨て、俺になった。

俺は床に落ちている髪の毛をゴミ箱に捨て、真新しい制服に袖を通す。
それは本来、兄が着るものだった。
「お兄ちゃん・・・・・・」
写真の中の兄は変わらず、笑っていた。
少し、ぶかぶかな制服の裾を引きずりながら玄関に向かう。
「これが女と男の体格差というものなのか」
そう思いながら靴を履く。
そして、家の扉を開けた。

最後に誰もいない自分の家に向かって言い、学校に向かう。
「行ってきます」

第1話　高校デビュー

「お止めください。」
母の声が頭の上で聞こえる。
「ダメだ。
　こいつにはあいつの代わりになってもらう」
同じく、父の声が聞こえる。
「ですが、この子は優介(ゆうすけ)ではございません。
　しかも女の子で思春期真っ最中なんですよっ！
　それは何でもこの子には酷ですっ！」
「そんな事はわかっている。
　しかし、家のためにもしょうがないんだ。
　それぐらいお前だってわかっておるだろう。」
「そうですが・・・・・・」
「なに、優介とこいつは双子だ。
　髪さえ短くすれば誰もわかりはしないだろう」
「しかしっ」
「もういいよ」
まだ、何か言おうとした母を私は止めた。
「でも、愛梨(あいり)・・・・・・」
「もういいよ、お母さん。
　お父さん、私は覚悟が出来てます」
父の目を見て私は言った。
そして、父は言った。
「よろしい。
　それでこそ私の娘、いや、息子だ」と。
それは今から一ヶ月前のお話。

あちらこちらで桜咲くこの季節。
どこの学校も入学式が行われていた。
そして、俺がこの春入る高校、私立青空高等学校でも同じく入学式が行われていた。
ザワザワ。
ざわつく体育館。
皆、新しい生活に期待を寄せる一年生ばかりだ。
「えー、・・・・この・・・・つきま・・・・おめで・・・・」
遠くの方で校長先生の長ったらしい話が聞こえる。
「多分、皆聞いて無いだろうな」
と思いながら俺は自分の順番が来るのを待つ。
「それでは、次に新入生代表を神無月優介君、よろしくお願いします。」
「ついに来たっ」
と俺は思いつつ、
「はいっ」
と手を上げ、舞台の方に行く。
『いいか、目立つことはするな』と父に言われていたが入学試験を一番で合格してしまったのだからしょうがない。
「本当は俺だってこんなめんどくさい事やりたくない」
と俺は思いながら舞台につながる階段を上る。
上り終えたら、今度は舞台の真ん中に校長先生に「どうぞ、どうぞ」と言われながら進む。
これから俺の高校デビューがはじまる。

第2話　新入生代表

「やった、一緒だっ！」
「えー、ズルイー」
キャッ、キャッ。
廊下から女子の黄色い声が聞こえる。
そして、みんな一年C組にいるある男を見ている。
そして、その男というのは・・・・・・優介に変装している愛梨だ。

春の日差しがちょっぴりまぶしい体育館。
そこは全校生徒２０３６人という有名私立高校、青空高等学校の体育館。
現在、この体育館では新しい生活にドキドキとワクワクでいっぱいの新一年生の入学式が行われている。
入学式も中盤に入り、今は舞台の上で新入生代表の挨拶が始まっていた。
「桜咲く今日、新しい生活に期待をよせる私達３５６人はこの度めでたくこの私立青空高等学校に入学いたしました。・・・・・・」
舞台の上にいるのは黒い髪のスラッとした美少年でいかにもかけているメガネが似合う、つまりメガネ男子と言いたいとこだが彼は彼女だった。
そう、その彼とは愛梨のことだ。
普通なら欠伸をしている生徒や辺りをキョロキョロしている生徒の一人や二人がいてもおかしくない、しかしこの場にそんな生徒はいなかった。
皆真剣に舞台の上にいる愛梨の話を聞いている。
何人かの女子（というかほとんどの女子）はポ～とどこか熱っぽい

感じに愛梨を見ている。
が、それを愛梨は新入生代表の挨拶をしながら『俺、しょっぱなから皆に嫌われたのかなぁ？』と思っている。
「以上、新入生代表一年C組神無月優介」
愛梨が礼をする。
これで愛梨の高校デビューの幕開けが無事終わった。
そして、冒頭に戻る。

この後、青空高校の女子達による優介（愛梨）のファンクラブが出来たのはまた別のお話。

第3話　何かが頭にぶつかった

「ここか・・・・・・」
そう言いながら愛梨は一年C組の教室に入った。

ここは私立青空高等学校。
有名私立なこともあってこの学校では一般庶民から誰もが知っている金持ちの子供など色んな生徒が集まる学校である。
クラスは上からA・B・C・D・E・F・G・H・Iと9クラスあり、上のA・Bクラスは古くから名の通った家しか通えず、C・DクラスはA・Bクラスまでは行かないがそこそこ名の通った家、E・Fクラスは最近有名になってきたつまり成金、G・Hクラスはそこそこ資産がある家、そして最後のIクラスは一般庶民となっている。
いろいろと（家の資産でクラスを決める辺りが）問題ありな学校だがそれでも生徒が集まるほど頭がいい。
差別などがありそうだがそんなものがあるのは上のクラスだけで下のクラスはそんなもん気にしてはいない。
私立青空高等学校とはそんな学校だ。

ザワザワ。
教室に入ってからというもの愛梨は何だか落ち着かなかった。
それというのも、さっきから同じクラスの生徒達に自分（愛梨）がジロジロと見られているような気がしてたまらないのだ。
まるで動物園にいる檻の中の動物を見ているような目で。
『昨日の入学式での新入生代表の挨拶は上手くいったと思う。
しかし、ここまで注目されるような事だっただろうか？』と愛梨

は思った。
そんなことを考えている時だった。
「うわぁーっっっ」
という叫び声が後ろから聞こえてきたのは。
「えっ」
何事だと愛梨は思い声が聞こえてきた方を向こうとした。

ゴツンー。
その瞬間、愛梨の頭に何かがぶつかってきた。
クスクス。
遠くからは笑い声が聞こえる。
『一体、何が起こったのだろうか？』と愛梨は思った。
しかし、そんな愛梨にもわかることがあった。
『たぶん、頭にたんこぶが出来ただろうな』ということが。
愛梨の高校デビューは実は始めっから最悪なのかもしれない。

第４話　女子は時に恐ろしい

「うわぁーっっっ」
ゴツンー。
愛梨の頭に何かがぶつかり、たんこぶが出来たのは間違えなかった。
「いってぇー」
愛梨がそう言いながら一体何がぶつかったのだろうと後ろを振り向いてみると、そこには自分の頭に当たったものだろうと思われる学校指定の鞄と多分その鞄の持ち主であろう少女と見間違えそうなぐらい可愛らしい男子というよりも男の子と言ったほうが似合っている同じクラスであろう子が心配そうにこっちを見ていた。
「あ、あの、大丈・・・・って、うわっ！！」
多分、その男の子は自分に謝りたかったのだろうと男の子の行動などから愛梨はわかった。
しかし、それは実現出来なかった。
優介の姿をした愛梨のもとへ集まってきた（この場合は群がってきたと言った方が合っていると思われるぐらいの）同じクラスの女子達によって。
「キャー神無月君、大丈夫っ！？」
「う、うん」
「優介君、大丈夫？」
「大丈夫、これくらい・・・・・・」
はじめは男の子を押しのけてまでも自分のもとへ押し寄せてきた女子達にちょっとは（ていうか、かなり）ビックリした愛梨だったが、この後にもっとすごいビックリが待っているとは思っていなかった。
そのビックリはすぐにやって来た。
「本当に大丈夫でございますか、優介様っ！？」
『様っ！！』↑愛梨の心の声
「ねぇー、実は痛いんでしょう優介ちゃん？」

『ちゃんっ！！』↑愛梨の・・・以下同文・・・
「撫でてあげよっか、優介？」
『もう呼び捨てっ！！』↑以下同文
「よしよし、ユウユウ♪」
『ユウユウっ！！
ユウユウって誰だっ！！』↑・・・・・・・
愛梨の頭の中に“！？”が飛ぶ。
そんな優介の姿をした愛梨をクラスの女子達が看護（？）というかかまう。
それを見て、クラスの大勢の男子達が優介の姿をした愛梨を“敵”と見なすのにそう時間はかからなかったのは言うまでもない。

「あ、あのー、俺まだ謝れてないんですけど・・・・・・」
そう言った男の子の言葉はもちろん愛梨に届くわけがなかった。

第5話　学食のきつねうどんはうまかった

「あー、君が噂の優介君かぁ」
時間はあれから進み、現在は昼休み。
ここ、青空高校では入学式の日でも六限目までである。
何でも校長いわく、「四限だけではこの学校の良いところすべては教え切れない」らしい。
そして今は学校の食堂で昼食を食べているところだ。
ちなみに愛梨は一人で食べているわけではない。
今朝、愛梨に鞄を投げつけてしまった男の子とその子の友達と食べている。
「もう、うちのクラスでも今朝のこともあって女子がキャーキャー言うてたで、なっ今朝のことの原因を作った人」
「うっせぇー、ヤス。
あのことは本ー当にごめんな、優介」
「あっ、うん。
それはもう良いんだけど・・・・・・俺達、まだ自己紹介してねぇーよな？」
実は愛梨達はまだ自己紹介もなにもしていなかった。
向こうは愛梨のことを知っているようだが、愛梨は今朝の男の子の方でさえ誰か知らなかった。
「おっ、これはワルイワルイ。
ていうか、ソウお前まだ自己紹介してなかったんかっ」
「だって、さっきまで女共が優介の周りウロチョロしてて話にもいけなかったんだぜ」
「その原ぇー因はお前やけどな。
まぁ、いいわ。
改めて優介、俺の名前は滝椿康志（たきつばきやすし）　一年D組や。
気軽に“康”って呼んでくれてええから、よろしくっ！！」

「滝椿って、あのデパートで有名な・・・・・・」
「そう、こいつん家はあの年がら年中何かとつけてはバーゲンやってるで有名なデパート屋さん」
「しょうがないやろ、俺んところの母さんが大阪のおばちゃんやねんから」
「康のところのお母さんが大阪の人かぁ。だから、康は関西弁でしゃべってるのか」
「うん、そゆことや。じゃあ、次はソウの番やで」
「おう。俺の名前は高星奏太郎（たかほしそうたろう）、組は知っての通りお前と一緒だ、優介。呼び名は何でもいい」
「ちなみにこいつん家の母さんは服の有名デザイナーで父さんは会社の社長兼トップモデル、そんで息子のこいつも実はモデルやねん」
「おいっ、康っ！！お前、余けぇなこと言わんでいいんだよっ！！」
「へぇかっこいいな、モデル」
「優介、こいつの場合“かっこいい”じゃなくて“かわいい”やで。なんたってこいつ、女のモデル専門やからな」
「だぁぁぁぁーー言うなっ！！康っ！！」
「何でいいじゃん。ぴったりだと思うよ、奏太」
愛梨は心からそう思い、ニッコリしながら言った。
それを見た康志はブフッと噴出し、奏太郎は一瞬怒鳴りそうになったがそれを押さえ、「はぁー」とため息をつき、
「お前、それもしかして天然？、それともわざと？」と言った。
「えっ、真面目に答えてるんだけど・・・・・・」
そう愛梨が言った瞬間、康志はついに腹を抱えてケラケラと笑い出し、奏太郎は先程よりもより深いため息をつき、
「天然か・・・・・・」と言った。

愛梨は二人を見て、ただただキョトンとしていた。
そんな感じに話が終わり、食事も食べ終え、さー教室に戻ろうとした時だった。
「あっ！！
奏、ちょっと待ち。
口元にご飯粒ついてるで」
「おっ、ホントだ」
「全く、お前はキヨが居らんかったら何もでけへんねんな」
「キヨって？」
愛梨は二人の会話で出てきた“キヨ”という人物が誰かを聞いた。
「あー、キヨっていうやつは奏の幼馴染でもあり奏のお母さん的な存在の奴や。
確か優介と同じクラスやと思うで」
「キヨは優介と同じクラスだ。
ほら、優介の後ろの席の奴今休みだろ。
あそこがキヨの席なんだ」
「ってことは入学式欠席だったのかっ！！」
「おう。
今は事情が会って来てねぇけど、その内来るんじゃねーの」
「まぁ、キヨのことやからなぁ」
最後に康志がそう言い、愛梨達は完全に席を立った。

第6話　複雑な事情

入学式も無事終わり、その後の授業（？）も無事に過ごせた愛梨は早くも友達となった康と奏太に別れを告げ帰路についていた。
帰る途中、近くのコンビニに寄り晩御飯を買う。
「ふむ、今日はから揚げ弁当とサラダにするか」
さて、皆さん。
今コンビニ弁当を買っている愛梨を見て、「お前、金持ち設定じゃねぇのかよ」と思った人いると思います（思っていない人もいるかも知れませんが・・・・・・）。
実は神無月家の子、つまり跡取りの権利がある子は代々決まりとして十六になるまで神無月を名乗ることが出来ず（ちなみに愛梨は今まで天野愛梨（あまのあいり）と名乗って公立の学校に通っていました）、そして十六から成人するまで神無月家から配給される毎月のお金でやりくりして一人で生活しなければならないのです。
そして愛梨も長男、優介の変わりをしながらもその決まりに則り住む所とお金を持たされてこの春、家からポイッと外に放り出されましたわけです。
そして現在、愛梨が住んでいるのは・・・・・・
「よし、着いた。
ホント、学校から遠いんだよなぁ、皐月荘（さつきそう）って」
私立青空高等学校から徒歩三十分、結構遠いところにあるアパート皐月荘。
何故そんなに遠いところに住むのか。
何故そんなに遠いのに徒歩なのか。
それは全て神無月家だとばれないため。
『というか、神無月家のことよりも女であることのほうが隠すの必死なんだけどね、私・・・・・・』
ガチャ、がチャ。

そう思いながらもドアの鍵を開ける。
「ただいま」
そう言いながら愛梨は返事のない部屋に入る。

これがこれからの日常になるはずだったのに・・・・・・静かで地味な日常を目指したはずなのに・・・・・決して周りがそうさせてくれないことを愛梨はもうまもなく直感することになる・・・・・。

第7話　行ってきます。

ピピピピピッッッッーー。
目覚まし時計が頭上で大きく鳴り響く。
「ん～～～」
だが、愛梨は起きない。
ピピピピピピピピピッッッッッーーー。
そんな愛梨を起こそうと目覚まし時計が頑張る。
「ん～、うるさぃ～」
しかし、愛梨はまだ起きない。
ピピピピピピピピピッッッ～～！
頑張る目覚まし時計。
「ん～」
ねばる愛梨。
ピピピピピピpッ！ッッダン！
「うっせぇんだよっ・・・・・・って、またやっちゃったな、はぁー」
そう言った愛梨の横には無残に砕け散った目覚まし時計の破片が散らばっていた。

春の新芽のような緑のワンピース
キラキラ光るアクセサリー、ワンピースにあう靴に鞄
そして忘れてはいけない黒く長いウィッグ
「よっしゃ、完璧ッ」
そう言った鏡に映る愛梨の姿はどこからどう見ても普通の少女の姿をし、そしていつものメガネをかけていなかった。
実は愛梨は目が悪くないのだ。

なのに何故、いつもメガネをかけているのかというと、兄である優介が目が悪くメガネをかけていたからである。
今日はその兄に会いに愛梨は病院へ出かけるのだ。
愛梨の兄、優介は現在意識不明中である。
医師には、「意識を取り戻す可能性は低い」と言われた。
その時の父と母の落ち込みようはすごかった。
母は自室に籠ってしまい、父は何もしゃべらず、ただ空を見つめていた。
もちろん愛梨もそれを聞いたときは泣きじゃくり、優介のそばにいると駄々をこねる程だった。
今は見舞いに行ける程平気にはなったが。
今日、青空高等学校は始業式前の休みで、『この日（今日）に絶対お兄ちゃんのお見舞いに行ってやるっ！』と愛梨は前々から決めていたのだ。
「ついでに今日壊した目覚まし時計も買って帰らないとね」
そう言いながら愛梨は家を出た。

「あっ、愛梨ちゃん。
お出かけかい？
気をつけていってらっしゃい」
「はい、行ってきます」
愛梨は皐月荘の階段を下りながら挨拶をする。
今、挨拶してきたのは皐月荘（ここ）の大家さんの吉永（よしなが）さんの奥さんで、吉永さん夫妻には愛梨と優介（実際は優介に成りすましている愛梨）の兄妹二人で住んでいると話している。

朝でも昼でもない、ちょうどいい気候の午前１０時
愛梨は階段を下り、駅に向かった。

第8話　ライオンもいいけど、クマもね

ピ、ピ、ピ・・・・・・・
少し消毒液臭い部屋に機械音が聞こえる。
「お兄ちゃん・・・・・・・」
そう呟いた愛梨の横で優介は目をつぶって横たわっていた。

ガヤガヤと賑やかな場所。
現在、愛梨は大手家電ショップに来ていた。
今朝、自らの手で壊してしまった目覚まし時計の代わりを買いに。
「ん～、どれにしようかな？」
そう言いながら目覚まし時計を選ぶ愛梨の目は赤く腫れている。
どうやら少し泣いたようだ。
いくら落ち着いたと言っても、優介の見舞いに行くと泣いてしまう。
まぁ、前と比べては随分落ち着けてはいるが。
愛梨はクマの形の目覚まし時計にするか、ウサギの形の目覚まし時計にするかで散々迷った末にクマの形の目覚まし時計にすることにした。（ちなみに、今朝壊した目覚まし時計はライオンの形であった。）
「やっぱり、カワイイ系を選らんじゃうのは仕方ないのかな～。
まーいいや、学校で男らしくしとけばいいだけだし・・・・・・」
実は愛梨は優介として学校に行くと決まった時から今まで、男の仕草や口調などをドラマや映画などで学習してきた。
たまに女としての愛梨が出てくるが、今ではだいたい優介のマネは出来ている。

だが、外側だけ優介になっても内側は元のままだ。
愛梨という女のまま。
「だから、こういう物選んじゃうんだけどね」
そう言って少し悲しくなる。
もう、こんな格好（女の子の格好）して外にへは出れなくなると思うと・・・・・・・
「・・・・・・・。
はぁー、もう早いとこ買って家に帰ろう」
そう言って、愛梨はレジの方に歩き出した。

その時っ
「キャッ」
愛梨は誰かにぶつかってしまった。
そして、ぶつかった拍子に後ろに転んでしまった。
「イタタタ」
「おっと、悪ィ。
大丈夫か？」
そう言って手を差し延べてきたのは、ぶつかった相手であろうスーツ姿の若い男の人だった。
『うわぁ、えらいスーツが様になった人だなぁ』
そう思いながらも、
「は、はい、大丈夫です」
と言って愛梨が手を借りて立とうとした時だった。

ズルー。
「えっ！？」
愛梨の頭の上から何かが滑り落ちる。
滑り落ちたそれは・・・・・・・
それは、愛梨がつけていたウィッグだった。

どうやら、さっきの転んだ時の衝撃で外れて（？）しまったらしい。
「えっ！！ウソッ！？」
愛梨は慌ててずれ落ちたウィッグをつけなおす。
しかし、時すでに遅し。
バッチリぶつかった相手に見られてしまった。

「えっ、アンタ男？」
相手は目をパチクリしながら言う。
「あ・・あの・・・えーと・・・・・・」
愛梨はしどろもどろしながらなんて言えばいいか迷っている。
もう、愛梨の頭の中は大パニック中だ。
そんな愛梨を見て何を思ったのかその男は
「ふーんあっそ、女装趣味」
と言い、さっきとは違う冷たい視線で愛梨を見ると

パシッ

いきなり愛梨の手を払いのけ、愛梨に背を向け歩き出した。
さっきまでの態度とは大違いに。
そんな相手にパニックの中、愛梨が言えたのは、というか叫べたのは
「お・・俺は・・女だぁーーーーー！！！！」
という女としてのせめてものプライドだった。

「俺」って言っちゃってるけどね。

第9話　遅刻だー！！

朝。
小鳥の鳴き声が聞こえてきそうなほど清々しい朝。
目が覚めた愛梨はベッドの上から部屋の壁に掛けられている大きな時計を睨みつけていた。
「・・・・・・午前・・・八時、十分・・・・・・に見えるのは気のせいか？」
愛梨は時計を睨みつけながら言う。
午前八時十分。
時計の針はそう指している。
「そんなまさか」
そう言いながら首を振る、目を擦りもう一度時計を見た。
「・・・・・・！！」
さっきよりも脳が起き始めている愛梨は時計を見て顔が蒼白した。
「う、嘘ッ！！八時十分！？」
そう叫びながらもベッドから飛び出す。
そして、リビングへと向かい急いでテレビのリモコンを取り、電源を入れる。
愛梨は祈った、さっき見た時計が実は狂っており、本当はまだ学校登校時間に間に合う時間帯なんだと。
しかし、愛梨の祈りもむなしく、現実は突きつけられた。

ーーピッーーー「おはようございます！朝八時十二分、芸能ニュースの時間です・・・・・・」ーーーー

いつもならそんなに気にならず、どちらかと言えば好意的な朝のニ

ュースのアナウンサー
が今はとても腹立たしい。
「ていうか、何で目覚まし時計は鳴らなかったんだ！！」
そう言って、思い出す。
「あー！！そうだった！！
結局、私あの後買わなかったんだった！！」
そう、愛理はあの後結局目覚まし時計を買わなかった。
いや、買えなかったのだ。
男（青年？）に女装趣味呼ばわりされた後、ガーンと落ち込んでいる愛梨。
そんな愛梨に追い打ちをかけるように周りからの奇異な目もあり、愛梨はすぐさま目覚まし時計も買わずに店を飛び出し、家に帰ったのだ。
「くそっ、あんにゃろー！！
って、怒ってる場合じゃないだろっ、私！！
もう八時十五分だよー（泣）！！」
急いで制服に着替え、慌てて靴を履き、家を飛び出す。
「初日から遅刻なんかイヤだーーーー！！！！！」
と叫びながら。

愛梨は焦っていた。
焦っていたため、忘れ物をした。
優介を演じるにして欠かせない物である、あのメガネを・・・・・・・。

第１０話　私の神様は現在旅行中ですか？

ぜぇー、ぜぇー
思いっきり走って呼吸困難に陥って倒れそうになりながらも、何とか両足でたち、走って乱れた制服を軽く直す。
そして思いっきりドアを開けて教室に入る。
入った瞬間、クラスの奴らに注目されたがそれは入学式のこともあり、あんまり愛梨自身気にしていなかった。
ただちょっと違うのはクラスの男子も女子と同じようにどこか熱の入った視線だったということなのだが、もちろん愛梨はそれに気づいてはいない。
自分の机の上に荷物を置き、実は隣の席であった奏太郎と何故か違うクラスなのにいる康志に挨拶をする。
「おはよー・・・・・・」
「おう、おはよー・・・・・・ってダレ？」
疲れ切った愛梨に向かって失礼なことを言ったのは奏太郎だった。
「なっ、失礼だなー。
俺だよ、俺、優介だよっ！！」
「あー、優介かぁー、眼鏡かけてなかったからわかんなかったよ、なっ、康？」
「・・・・・・」
「おいっ、康？」
奏太郎の応答に返事がない。
康志は「ぽかーん」と口を開けて呆けていた。
「そうだよ、俺、今日眼鏡かけてないっっっっっっってえぇぇぇぇ！！
うそだろ！！俺、眼鏡かけてないのか！！！！」
そして、愛梨は自分が眼鏡かけていないことに今気がついたのであった。

愛梨は走った。
全力で走った。
後ろからゾウに追いかけられているかのように走った。
具体的に言うと通学時間三十分のところを約十五分ぐらいにしてしまうぐらい。
愛梨自身も「人は必至になるとこんなにも頑張れるのか！！」と驚いてしまった。
そんな余裕のなかった愛梨だが、一つだけ走っていて気がついたことがあった。
それは、何故か今日は人の視線をいつも以上に感じていることだった。
「なんなんだろう？」
そう思いながらも急いで学校へ行き、何とか学校の予礼にギリギリ間に合い、やっと「ほっ」と出来た愛梨であった。
が、優介を演じるにあたって必要な眼鏡を忘れてしまったことに気がつき（自分で気がついたわけではないが・・・・・）、またもやハラハラすることになってしまった。
幸い、優介を知っているものはこの学校にはいない（入学する前に一応家の方でチェック済み）ので助かったのだが。

キーンコーンカーンコーン
本礼もなり、康志が自教室に戻ったので愛梨も自分の席に着いた。
「はぁー、それにしても今日は慌ててたから気付かなかったなー」
「あー、だから驚いてたのか。
そりゃ、慌てるよな、なんせ初日早々遅刻しそうだったんだから」

そうからかいながら奏太郎が笑う。
「う、うるさいな～」
「ハハッ。
それにしても、眼鏡って忘れるものなのか？」
奏太郎の鋭いツッコミに愛梨は「ウッ」となった。
「えっ、え～と。
その～、俺、目ぇ悪いけど、いつもかけとかなきゃいけねぇほど悪くないんだ、うん。
入学式の時は字も読まなきゃいけなかったし、まだ高校の建物全部を把握してたわけでもなかったから一応つけてたんだ」
愛梨は苦し紛れに説明する。
「あー、そういうことか」
どうやら奏太郎は納得してくれたらしい。
それに愛梨はほっとし、
「そう、そうなんだよ」
と言っている。
そんな感じで奏太郎と喋っていると、担任が教室に入ってきた。

ガラガラガラー。
ここで普通ならば「起立」という号令がかかるはずだが、まだ役員を決めていないので今日はない。
そのかわりに担任の先生が号令をかける。
「起立・・・・・・礼・・・・・・・着席。
おはようございます。
えー、今日はみんなに紹介したい人がいます。
まー、ひとまず入ってきてもらいましょうか。
あー、入ってきてください、篠色（ささくさ）君」
ザワザワー。
ざわめくクラスメイト達。
ガラガラー。

そして、ついに新しいクラスメイトが入って来た。
「どんな奴だろ？」
そう思いながらも、周りと同様にちょっとワクワクしていた愛梨。
しかし、入ってきた奴の顔を見た瞬間、愛梨の笑顔が凍りついた。
「・・・・・・っえ！？」

第１１話　神様、お土産は食べれるものにしてください。

「どうぞ入ってきてください、篠色くん」
ガラガラー
クラスの皆が好奇の目で入ってくる奴を見る。
愛梨もそんなクラスメイトと同様だった。
しかし、入って来た奴を見た瞬間・・・・・・・

「げっ！！」

思いっきり笑顔を引きつらした。
「う、嘘だろ・・・・・・」
そう言って、もう一度見る。
間違いない。
スラッとした高い身長に、なで心地の良さそうな黒い髪、そしてきれいに整った顔。
間違いない。
そいつは今日の寝坊の原因であり、愛梨の心に傷をつけた張本人でもある。
そう、昨日の例のあいつだ！！
『何だったて、あいつがここに！？』
もうこの世の終わりと言いたそうな愛梨。
そんな愛梨の横で奏太郎がニコニコ笑う。
「あっ、キヨだぁー。
あいつ、やっと学校来れるのかぁ」
ニコニコ
「優介、あいつがこの前言ってた“キヨ”だぜ」
ニコニコ
「・・・・・・な、なんだって」

「だから、あいつが“キヨ”だって」
「・・・・・・」
数秒固まる愛梨。
そして叫びたくなった、が一応そこは押さえて奏太郎に聞く。
「えっ、“キヨ”って＞お母さん的存在＜と奏太郎が言ってたあの“キヨ”さん？」
「そうそう、その“キヨ”っ！
・・・・・・って、どうしたんだ優介？
もしかして暑いのか？
汗がダラダラ滝のように流れてるぞ？」
「・・・・・・え？
あっ、うん、なんでもないよ」
愛梨はいつの間にか流れていた汗を制服の裾で拭う。
だけれど、拭っても拭っても汗は流れてくる。
『ほ、ほんとにどうしよう！！
確かあいつって私の女の姿も男の姿も知ってるんだよね。
しかも今日、メガネかけてないし・・・・・・誤魔化し様がない！！
どうしよう、どうしよう！！！！
これは・・・・・・これはあいつが私の顔を覚えてないことを願うしかない！！
えぇーい、どっかにいる神様、仏様！！どうか私を助けろー！！！！！』
そう愛梨は願い、黒板の方に向き直った。

「え～じゃあ簡単でいいので、ま～自己紹介でもしてもらおうかな」
先生がそう言いながら黒板に奴の名前を書き始める。
それと同時に奴が口を開く。
「篠色清重（ささくさきよしげ）、よろしく」
が、喋ったのはこれだけだった。
「あらまー、ホントに簡単だねー。

まーいっか。
篠色君の席は、ここから見て右から三列目の前から五列目、神無月君の後ろだから」
先生がそう言うと奴、篠色は無言で席に向かい出した。

『やばい、来る』
愛梨は不自然じゃない程度に顔を伏せる。
見えるか見えないかのギリギリ。
ドキドキ
篠色が近づいてくるとともに緊張感がわいてくる。
そんな愛梨の横で奏太郎は呑気に「清ー」と嬉しそうにしている。
どんどん近づいてくる篠色の足音。
それに比例するようにバクバクなる胸の鼓動。
『どうか、どうか私のこと覚えてませんように！！』
愛梨はそれだけを一心不乱に願い続けた。
そして、ついに足音は愛梨の座っている机の近くまで来た。
『通り過ぎろォー！！』

ピタリ
何と篠色は愛梨の机の前に止まった。
『やっぱり、覚えてたか！？』
愛梨はそう思った。
しかし、ここで諦める（？）のはまだ早い。
『いやいや、きっと止まったのは奏太郎がいるからだよ』
そう、それ以外のはずがない。
きっと大丈夫。
そう愛梨が思った瞬間だった。

グイッ
いきなり篠色に顎をつかまれ、顔を持ち上げられ、そして・・・・・
・

そして、
「やっぱり、お前、昨日の女装野郎じゃねーか」
と愛梨の願いもむなしくクラス全員の前でハッキリ言われたのは。

愛梨はその瞬間、
「あー終わったな、私の人生・・・・・・（泣）」
と悟ったそうな。

第12話　噂って、怖いね。

ヒソヒソヒソ、ジロジロ。
『見られてる・・・・・すっごく、見られてる』
それはすべて隣に立っている篠色(こいつ)のせいで・・・・・。

～ある一部の女子の会話～
「ねぇ、見た？
今日の優介様と転校生！！」
「あー、見た見た！！
優介様はメガネはずしたら美人だよねー！！
しかも、転校生もかなりカッコイイし！！！」
「じゃぁ、これは聞いた？
その転校生が優介様に向かって『女装野郎』！！って言ったらしいよ！！」
「うん、聞いた聞いた！！
ていうか、二人って知り合いぽかったみたいだよねー！！」
「二人の関係って・・・・・」
キャー／／／
目くるめく、女子の妄想、爆走中。

～ある一部の男子の会話～
「おい、神無月のメガネ無し、見たか？」
「おう、見た見た。

なんて言うか、その、男が言うのもあれだけど・・・・・・・」
「「可愛かったなぁ」」
カァァァァ／／／
「いやいや、俺にそんな気はないぞ！！」
「俺だって！！」
「「でも・・・・・・」」
「「女装したとこ見てみたいよなぁー」」
思春期男子のちょっとした、希望。

「いやー、ほんまにびっくりしたわー。まさか優介があないべっぴんさんやったとは」
康志が笑いながら言う。
それに対して愛梨は「ハハハ・・・・・・」と苦笑いするばかり。
「ホント、びっくりだよな～。優介ってメガネかけるかで印象全然違うよな」
「そっ、そうかなぁ～」
そんな感じに和む三人（やく一名は内心冷汗ダラダラ）。
そんな三人を不機嫌そうに見る奴がいた。

「あーぁ、やっと友人が学校に来たって言うのにお前らは女装野郎のことばっか。
はぁー、泣きたくなるね」
奏太郎の背中にダラーンともたれ掛かりながら芝居がかったように言った奴、篠色だ。
「ちょっ、キヨ重いって。

っていうか、お前が学校休むのよくあることじゃん」
奏太郎がムムムと篠色を背中で押し返そうとしながら言う。
「そや、そや。
お前さんが休んだくらいで誰も心配せーへんわ。
それより、お前が優介に言ってた『女装野郎』ってどういうことや？」
急にニヤニヤした顔で篠色に聞く康志。
そんな康志の言葉を聞いていっせいに耳を傾けてくるクラスメイト達。
『ちょっ、その話題！！』
焦る愛梨。
康志は愛梨が焦っているのを確認するとさっきよりも大きな声で篠色に問う。
「優介に『女装野郎』って言った理由、教えてくれてもいいんちゃう？」
「俺も聞きてぇー！！」
そこに奏太郎も乱入。
『あわわわ、どうしよう！！！』
さらに焦る愛梨。
篠色にそのことについて喋らないという保証はない。
というか、別に喋ったって、篠色が損をするわけでもない。
『ど、どうか、喋りませんように！！！！』（↑本日、二度目の神頼み）
しかし、神は二度も愛梨を裏切った。
「ん？

だって、そいつ、昨日・・・「はいっ、篠色君、ちょっとお話しましょう！！」」
愛梨は話始めた篠色の手を掴み、教室から飛び出した。
ていうか、いつの間にか無意識にそうしていた。

「あーあ、行っちゃった」
二人が出て行った方を見ながら奏太郎が言う。
「ちっ、あともうちょっとやったのに」
そう言った康志の言葉に教室にいた全員が「同感だ」と思った。

第１３話　家に湿布ってあったかな？

はぁー、はぁー、はぁー。
学校の廊下を走り切り、階段を何段も駆け上っていくと、必然的にたどり着くのはあのお決まりの屋上。
立入禁止と書かれた紙を無視して、老朽で今にも崩れ落ちそうな鍵をドアを蹴り飛ばすことによって壊し、そのままの勢いで屋上に出る。
その一連の動作を男一人、引きずって上って来た愛梨はすごい。

まぁ、すべて無意識で行っていたことなのだが。

「はっ」
屋上に出ることによって、涼しい春の風にあたり、今更になってハッとする愛梨。
しかし、時すでに遅し。
意識を取り戻した愛梨が、恐る恐る振り返る。
振り返った先には・・・・・・もちろん、不機嫌に睨んでくる怖い顔の篠色がいた。

「あー、えーと、これは、そのー・・・・・・」

何て弁明すれば、奴は納得してくれるだろうか。
そんなことを思いながら、目を泳がし、言葉を探す愛梨。
そんな愛梨にお構いなく篠色は、愛梨が掴んでいた自分の制服の腕の裾をバシッと振り払い、はなす。
そして、ツカツカと屋上から出て行こうとする、無言で。

それを愛梨はいそいで止める。
「ちょっ、ちょっと、待ってくれっ！！」
止めるために今度は篠色の制服の背中部分の裾を引っ張る。
もうここまで篠色を連れて来たなら、“女装”のことを口止めしようと愛梨は考えた。

しかし、それは難しいのではないかと振り返った篠色を見て愛梨は思った。

振り返った篠色は、先ほどよりも不機嫌さが増していた。
『そんなに私のこと、嫌いかよっ！』
そう思いながらも、一応、愛梨は口止めを試みる。
「あの、昨日のことだけどさ・・・・・・「そのこと、忘れてほしいとか言うんじゃないよな」」
喋りかけた愛梨を篠色が遮る。
そして、篠色が話を続ける。

「あのさー、お前。
昨日は「女だー！！」とか言ってたくせに、今日になって「男です」とかさ・・・・・・」
そう言いながら、篠色はさっきの行動とは反対に愛梨を追い詰めていく。

ガシャンー

『いったー』

屋上のフェンスに思いっきり背中をぶつけた愛梨。
もう、これ以上下がれない。
そこまで追い詰めて、篠色は軽く睨んでみた愛梨を見降ろしながら、

見下しながら、ハンッと鼻で笑いながら、言った。

「何、お前。
もしかして「体は男ですけど、心は女です」とか？」

むかっ

それを聞いた愛梨の中で何かがブチッという鈍い音を立てて切れた。
そして反射的に手で拳を作り、それを篠色の顔面めがけて振り上げていた。

パシッ

が、いくら今は男の優介であれども、女の力が男に適うわけがない
「・・・・・・っ」
案の定、止められる。
「うわっ、あぶねぇ。
何？、怒ったの？」
クスクス笑いながら問う篠色。
「細ぇー手だなぁ」
止めるためにつかまれた愛梨の細い手首が篠色が力を込めるたびに、キシキシと軋んで折れそうだ。
「・・・・・・」
その苦痛に耐えながらも、愛梨は篠色の問いに答えず、ただひたすら無言で睨む。
いや、睨むのが精いっぱいだ。
愛梨は今、怒鳴りたい気持ちでいっぱいである。
だが、今の愛梨は優介であって、愛梨ではない。

よって、私情による行動は許されない。
「だんまりかよ」
「・・・・・・」
「・・・・・・まぁ、いいや。
俺、お前のこと、嫌いかも」
黙り続ける愛梨に飽きたのか、篠色はそう言うと学校の中へと帰っていった。

愛梨は、今度はそれを追わなかった。
だって、今追えば、怒りにまかせて何をするかわからないから。
もしかしたら、本当のことをペロッと吐いてしまいそうだから。

「話し合い何か、どーせ元々出来っこなかったってことか・・・・・・」

ポツリと呟く愛梨。
篠色のいなくなった屋上でフェンスにもたれかかりながら、愛梨は空を仰ぐ。

「あーあ、初日から嫌われちゃったぽかったなー」

そう言いながら、伸びをする。

「優介が復帰した時、支障をきたしたらどうしようかなー？
っていうか、自分のことで怒ったの、俺、何年ぶりかな？」

空に向かって上げた手を見て、手首の痛みを思い出す。

「あいつ、力いっぱい掴み上がって」

こんなに悔しい“痛み”は久しぶりだ。

「あいつが俺のこと嫌いなら、俺もあいつのこと嫌ってやるっ！」

昔っから、兄のこと以外で怒ったことなかった自分が、何で今回の些細なことでキレたのだろうか？

「あっ、やべ、一限目始まってるんじゃねーのっ！！」

何でだろう？

「やばいっ、やばいっ」

あいつに、侮辱されたから？嫌われたから？

それとも・・・・・・

「あー、ついてないな今日はっ！」

まっ、いっか。

愛梨は走った。

間に合いもしない授業のために。

第１４話　う、嘘でしょ！？

今日は散々だった。

篠色には女装野郎呼ばわり＆「嫌いだ」と言われたし、うっかりボーとしてたら、初日の授業に遅刻した。

本当に今日は散々だった。

だから、こんな日は学校帰りにいつものコンビニへと寄り、晩御飯と一緒にお菓子やジュースをいっぱい買って、家でテレビでも見ながら、だらけて、今日あった嫌なことを忘れたかった。

なのに・・・・・・

なのに、神様はそんな愛梨のちょっとの幸せをも、不幸に変えてしまった。

「なっ！？」

愛梨は驚きのあまり、持っていた荷物を落とす。

「優介くん・・・・・・その、すまんね」

大家さんの吉永さん夫妻が、申し訳そうに優介に謝る。

だけれど、愛梨はそんな夫妻を無視し、ただただ目の前の状況に驚き、立ち尽くす。

愛梨の目の前に見えるのは、皐月荘。

愛梨が学校に行く時にはいつも通りの姿をしていた。

なのに、愛梨が学校から帰って来た、現在午後七時ちょっと前の皐月荘は、何とも痛々しい姿になっていた。

「すまんね、優介くん。
優介くんが学校にいっている間に、トラックがこの皐月荘に突っ込んできてね。
ドライバーは無事で、原因は居眠り運転でね。
その・・・・・そのトラックが突っ込んだ場所が、ちょうど優介くんと愛梨ちゃんが住んでるところの真下でね。
その、兄妹二人だけで大変なのは知ってるけどね・・・・・・あの、今の場所は下が潰れちゃったから、住むのには危険でね・・・・・・・えっと、その・・・・・・」
本当に申し訳ないと思っているようで、吉永さん（夫）は言いにくそうに事情を話す。
そんな夫にしびれを切らしたのか、妻が、夫が言いたかったことをズバッと言う。

「というわけだから、優介くん。
あなたの行ってる学校にも、愛梨ちゃんが行ってる学校にも、寮ってあったでしょう？
ちょっとの間だけ、すまないけど、そっちに移ってくれないかしら？」

フリーズしたままの愛梨の頭には、その言葉はあまりにも理解しがたいものだった。

はたして、愛梨の不幸は、これだけで収まるのだろうか？

第15話　さて、無事に暮らしていけるのやら？

青空高等学校の敷地内。

学校のすぐ横。

同じような建物が立ち並ぶ中、学校側から四つ目の建物。

C・D組専用の寮。

“那由他寮（なゆたりょう）”と書かれた表札がある寮。

「ここか・・・・・・」

その寮の入口に突っ立ってるのが、俺、いや、私、神無月愛梨、十六歳、女。

そして、この寮は、男子寮。

『お兄ちゃん。

ハッキリ言って、私・・・・・・今日からどうやって生きていこう（泣）。』

愛梨は、今にも泣けそうです。

男子寮のわりには、中は以外と綺麗であった。
各部屋お風呂付き、ロビーには自動販売機も置いてある。
だけれど、人っ子一人も見当たらず、寮じたい閑散としている。
「いやー、災難だったね」
そんな寮の廊下を愛梨の一歩前を歩いている人。
この人はこの寮の寮長、柚透宏人(ゆすきひろと)先輩である。
眼鏡をかけて、さっきから愛梨に気遣ってくれ、愛梨は「やさしそうな人だなー」と思った。
「はい、まさか俺も帰ったら家がもう住めない状態になってるなんて、思ってもみなくて」
「アハハハハ」と笑いながら言葉を返す愛梨。
そんな愛梨をさっきまで笑っていた先輩が急にまじめな顔でジーと愛梨を見た。
愛梨はそれに気づき、「何ですか？」と聞く。
そしたら、先輩はクスッと笑いながら言う。
「いや、笑った顔、カワイイなーと思って」
「はっ？」
いきなり言われて愛梨は？になった。
「いや、何でもないよ。
それより、この寮、あんまり人いないと思わない？」
愛梨は何だか流されたような気がしたが、先輩がそのまま言葉を続けるので、あまり何とも思わなかった。
「はい、思いますね。
俺の中の寮のイメージって、もっと賑やかだと思ってたので」
「うん、たぶん、G・H・I組辺りの寮はそんな感じだと思うよ。
E・F組の寮でも、ここよりは人は大勢いるだろうね。
でも、ここはお金持ちのお嬢様や坊ちゃん達のC・D組の寮だから、だいたいが家から通ってるから、わざわざ寮に通う奴なんて殆どいないんだ」
「そーですよねぇー」

それを聞いて、愛梨は少し不安になった。
昨日まで、一般家庭、いわば庶民の生活をしてきた愛梨。
双子の兄がいる、しかも女の愛梨は今まで神無月の子としては育てては貰えていなかった。
愛梨の兄、優介は神無月家、待望の長男で、愛梨は三女であった。
年のかなり離れた二人の姉たちは、愛梨とは腹違いで、姉たちの母は正妻、愛梨の母は・・・・・・愛梨の母は、愛人であった。

「愛人の・・・・・・しかも、娘などいらない」

そう四歳の愛梨に言い放った父は、愛梨とは違って神無月家で暮らしていた優介が事故にあい、意識不明になったため、それを世間に知られたくないために、十五歳（その時）になった愛梨と母を呼び戻した。
そんな庶民育ちの愛梨が果たして、この金持ちしかいない寮で暮らして、いや、生きていけるのだろうか？
「おい、神無月君。
どうしたんだ？」
「あっ、いや、なんでも。
それより、先輩。
俺、年下なんで、別に呼び捨てで構わないですよ」
「じゃあ、優介でいいかな」
「あっ、はい」
『私、てっきり苗字を呼び捨てにされるもんだと思ってたけど・・・・・・まっ、いっか』

まだ、このときの愛梨は、一応、新しく迎える寮での生活に期待を寄せていた。

そう、このときまでは。

第１６話　もう、これは全部夢であってほしい。

「あっ、そうだ。
はい、これ」
柚透が思い出したかのように持っていた書類を愛梨に渡す。
「？
何ですか、これ？」
そう言いながらも受け取る愛梨。
手渡されたのはある程度の分厚さの冊子で、表紙には「これから寮で暮らす諸君のためのガイドブック」と書かれている。
パラパラとめくってみた大体の内容は規則についてであった。
「基本、結構自由なうちの学校だけど、一応、規則あるんだよ。
大体でいいから目、通しといてね」
「はぁ、わかりました」
『大体って言われても、規則はきちんと読まなきゃなー。
でも、この中途半端な量の多さって・・・・・・やっぱ読むのに時間掛かりそーだな。
はぁー』
小さく心の中でため息をつく愛梨。
そんな愛梨の前を歩いていた柚透の歩行が止まった。
「あっ、ここだ。
優介、君の部屋だよ」
そう言われて、愛梨は視線を冊子から上げて、目の前を見る。
ドアの横にはプレートがあって、ちゃんと「神無月優介」と書いてあった。
それを見て少し愛梨はドキッとする。
まだまだ慣れない名前だが、この名前とともにこれからの大事な“青春”を体験していくことに愛梨は期待を抱く。
もちろん、不安は大きいが、この寮での新しい暮らしに対して少し

ながらわくわくしている愛梨。
『あー、ここで暮らすのも、ちょっと楽しみかも』
そうまじまじと名前が書かれたプレートを見つめていた愛梨は、「神無月優介」の下にもう一欄プレートが入っているのに気がついた。
「！！
あれ、もう一人・・・・・・？」
しかし、そのプレートは、上からガムテープがこれでもかと言うほどに張っており、書かれているはずの名前がわからない状態であった。
愛梨の質問じみた言葉に、柚透がそれに気づく。
「あっ、アイツ、またやったな」
柚透が少し困ったかのような顔で後ろ髪をかく。
「また」ということからこれが初めてじゃないのだろう。
そんなことよりも愛梨は一つ気になった。
「えっ、アイツって、俺、一人部屋じゃないんですか？」
恐る恐る柚透に聞いてみる愛梨。
もしも、一人部屋ではなかったら、愛梨はプライベートも“優介”でいなきゃいけないことになる。
「まさか」と少しビクビクしている愛梨に柚透は笑顔を向け、部屋のドアをゆっくり開けながら言う。
「ん？
あぁ、ここの寮、人少なくて、俺と優介以外に、一個上の二年と君と同じ一年の奴しかいないんだ。
だから部屋は腐るほど余っているんだが・・・・・・ほら、その規則に＞同学年の相手がいる場合、共同で過ごすこと＜って書いてあるから、さ」
それを聞いた時と柚透が部屋のドアが開け切った時は同時だった。
そして、その瞬間、目にしているものと耳から入った情報が脳に入

った瞬間、愛梨は叫びそうになった。

地声よりも高く、しかも高校生男子が出せないであろう高さの声を自分の口から出るのを止めるのがやっとだった。

だから顔に出た表情は隠しきれなかった。

「っ！！！！！」

愛梨は本気で現実逃避したくなった。

第17話　とにかく、眠い。

どよ～ん
朝から空は白く曇っていた。
そして、愛梨も朝から曇っていた。

「どうしたんだ、優介。
そんなに元気なさそうにして？」
自分の机に頬を押し付けるような格好で、「はぁー」と暗い溜息をつく愛梨を横から男にしては可愛らしい、何でも女性のモデルの仕事もしているらしい奏太郎が顔を覗かせた。
それに虚ろな目で顔に薄っぺらい笑いをくっつけた様な元気のない顔で愛梨が答える。
「あー、奏太～。
そだな、昼に食べたプリン、美味しかったな・・・・・・」
「いや、そんなこと聞いてねぇーし。
しかも、昼にプリンなんか食ってねぇじゃん」
すかさず愛梨のおかしな答えに奏太郎は突っ込み、「こりゃ、重症だわ」と顔を上げる。
奏太郎、いや、誰から見てもどこか重症な愛梨。
そんな愛梨に聞こえるように、後ろから声がかかる。
「はっ。
そりゃ、元気もなくなるよな。
なんせ、寮の部屋、あんな顔するほど嫌いな俺と一緒だもんな、女装野郎」
わざとなのか、皮肉のこもったわざわざ大きな声で。
その声に愛梨はビクンッと反応し、急に背筋を伸ばす。
奏太郎は、その清重の言葉と愛梨の反応でそのことが本当だとわかると、心底ビックリしたようで、思わず叫んでしまった。

「えー！！
清と優介、寮の部屋一緒なのかっ！？」
先ほどの清重よりも大きな声。
六限目ＨＲ（ホームルーム）、今度ある球技大会の種目決めで盛り上がるクラスの生徒を一斉に振り向かせるほどの大きな声。

クラス中の生徒の目を一身に受け、愛梨は机にうつ伏した。
暗く机しか見えない視界とは裏腹に、耳に聞こえるのは何故か女子生徒の「キャー／／／」という感極まった声と奏太郎の「よかったな」という声。
（何がいいものか・・・・・・）
そう思いながら「はぁー」とため息がまた出る。
（あんな顔するほど嫌いって、先に「嫌い」って言って来たのあっちじゃん）

昨日。
柚透に案内された部屋。
なんとそこには愛梨が会いたくないベスト１の男、篠色清重がいたのだ。
そして、驚きの余りに愛梨は・・・・・・愛梨は、心底嫌な顔をしてしまった。
後で悪いことをしたと愛梨も思ったが、清重もそんな愛梨の顔を見て不機嫌な顔になっていた。
その後はもうただただ重い沈黙が続くだけ。
お互い、一言もしゃべらなかった。
部屋の雰囲気は息苦しく、しかも女とバレないかハラハラドキドキの愛梨は当然眠れるわけもなく、今現在にいたる。

（あー、眠いな～）

あんな雰囲気の中、これから暮らしていくと思うと先が思いやられる。
きっと清重の方も自分と同じことを思っているのだろう。
そう思いながら、愛梨はいつの間にか深い眠りについていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1222e/

サヨナラ私、コンニチハ俺

2010年10月15日21時28分発行